

## オニバス種子の発芽観察

橋本卓三

福山市千田町の千塚池で、1986年10月に採集した19個のオニバス果実の内、13個について果実毎に種子を保存し、5年間に渡って発芽数を記録した。種子は水を満たしたポリエチレン容器に入れ、直射日光の当たらない戸外もしくは室内に置いたが、No.16, 18の容器では、1988年秋に水が無くなって一時的に種子が乾いた。発芽は、どの年も大体5~10月に観察されたが、室内では4月から発芽が見られた。最盛期は初夏から夏にかけてであった。No.1, 2, 5以外では、初めの2年間位は容器内の水が著しく着色(褐色)し、臭気がするので、何度も取り替えた。

表1に果実毎の種子の性質と、5年間の発芽数を示す。この試料については、種子の形態から、ほぼ球状で表面に凹凸の多いI型と、楕円体状でやや小さく、表面の滑らかなII型とに分けられた(橋本, 1986)。No.2の果実がII型の種子のみを、No.1がI型とII型を共に含む以外は、種子の形態は、その大小は別として、ほとんど全て

I型であった。

種子の発芽状況を、果実の未熟のためか、途中でかなりの数の種子が腐敗したNo.16を除く12例について見る。No.2, 5では2年目(果実採集の翌々年)に80%以上の種子がいつせいに発芽し、その前後の年には、ほとんど発芽が見られなかった。両者共に種子の平均湿重は0.5g未満であった。No.1, 13も、平均湿重は0.5~0.7gとやや大きいものの、似かよった傾向の発芽様式であった。その他の8例では、変動が大きいがおおよそ全観察期間に渡って継続的な発芽が見られた。この内、No.3, 4, 6, 8, 10では種子の平均湿重は0.7g以上であったが、No.9, 12では0.5~0.6gであり、No.18では0.4g未満だった。5年間に渡る発芽割合は、1例で60%だったのを除くと、50%未満の3例と80%以上の4例とに分かれたが、平均湿重との間には特に関連は見受けられなかった。

## 引用文献

橋本卓三、1986。福山市千塚池のオニバス。  
水草研究会報 26: 6-11。

表1. オニバス種子の5年間の発芽状況

果実番号	種子数	平均重 (g)	密度 (g/cm <sup>3</sup> )	1987	1988	1989	1990	1991	発芽合計 (%)
No.1	162	0.66	1.3	2	54	99	3	0	158 (98)
2	144	0.43	1.3	0	127	0	1	1	129 (90)
3	103	0.78	1.2	7	4	15	6	12	44 (43)
4	101	0.73	1.2	9	3	30	21	20	83 (82)
5	91	0.47	1.3	0	77	0	0	0	77 (85)
6	85	0.75	1.2	19	2	4	6	10	41 (48)
8	58	0.73	1.2	4	15	11	17	2	49 (84)
9	77	0.54	1.2	18	8	2	0	4	32 (42)
10	52	0.70	1.2	0	1	0	7	23	31 (60)
12	62	0.57	1.2	9	7	9	20	7	52 (84)
13	56	0.56	1.2	0	39	5	3	1	48 (86)
16	32	0.58	1.1	23	0	-	-	-	23 (72)
18	40	0.37	1.2	1	8	20	7	0	36 (90)